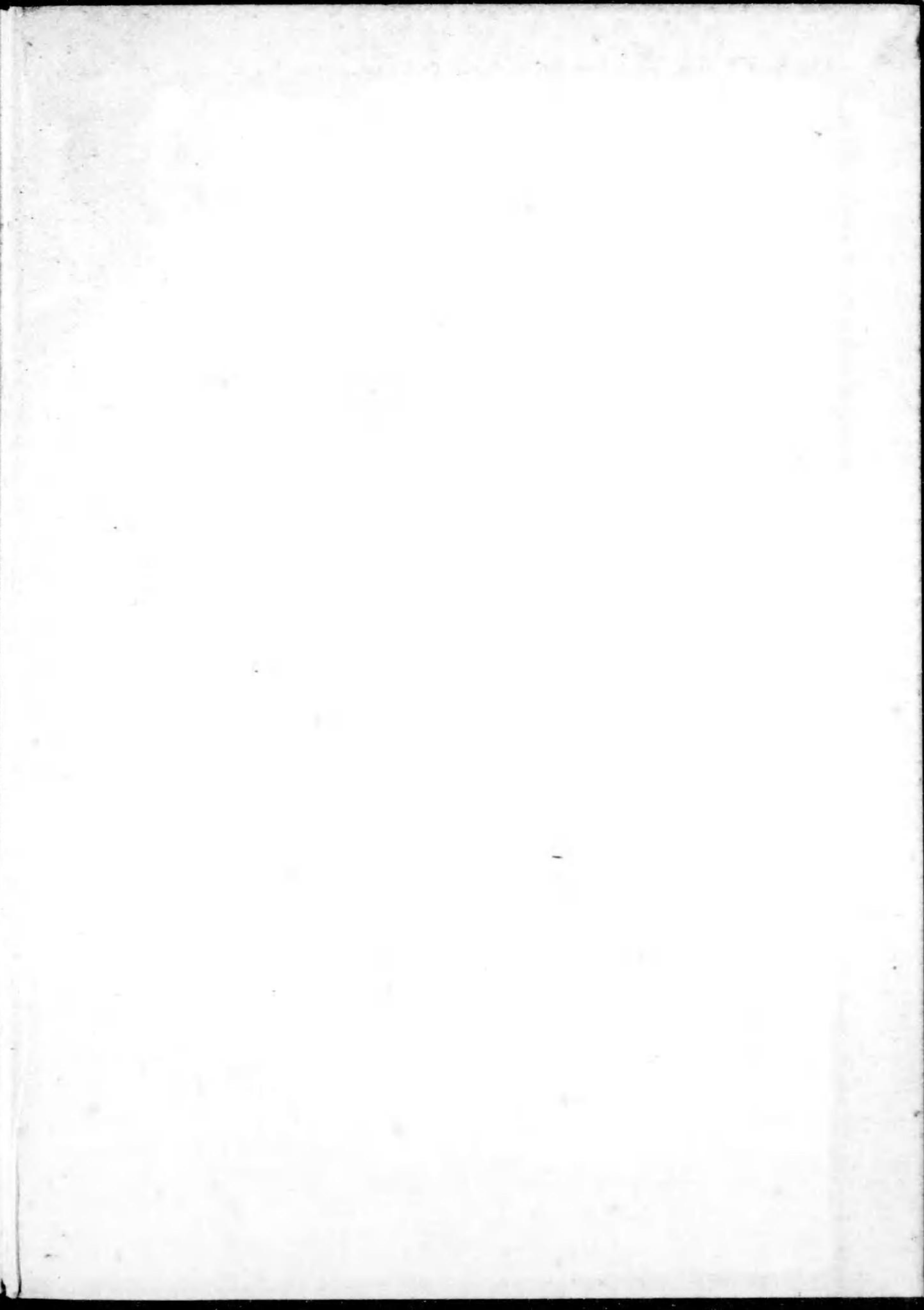
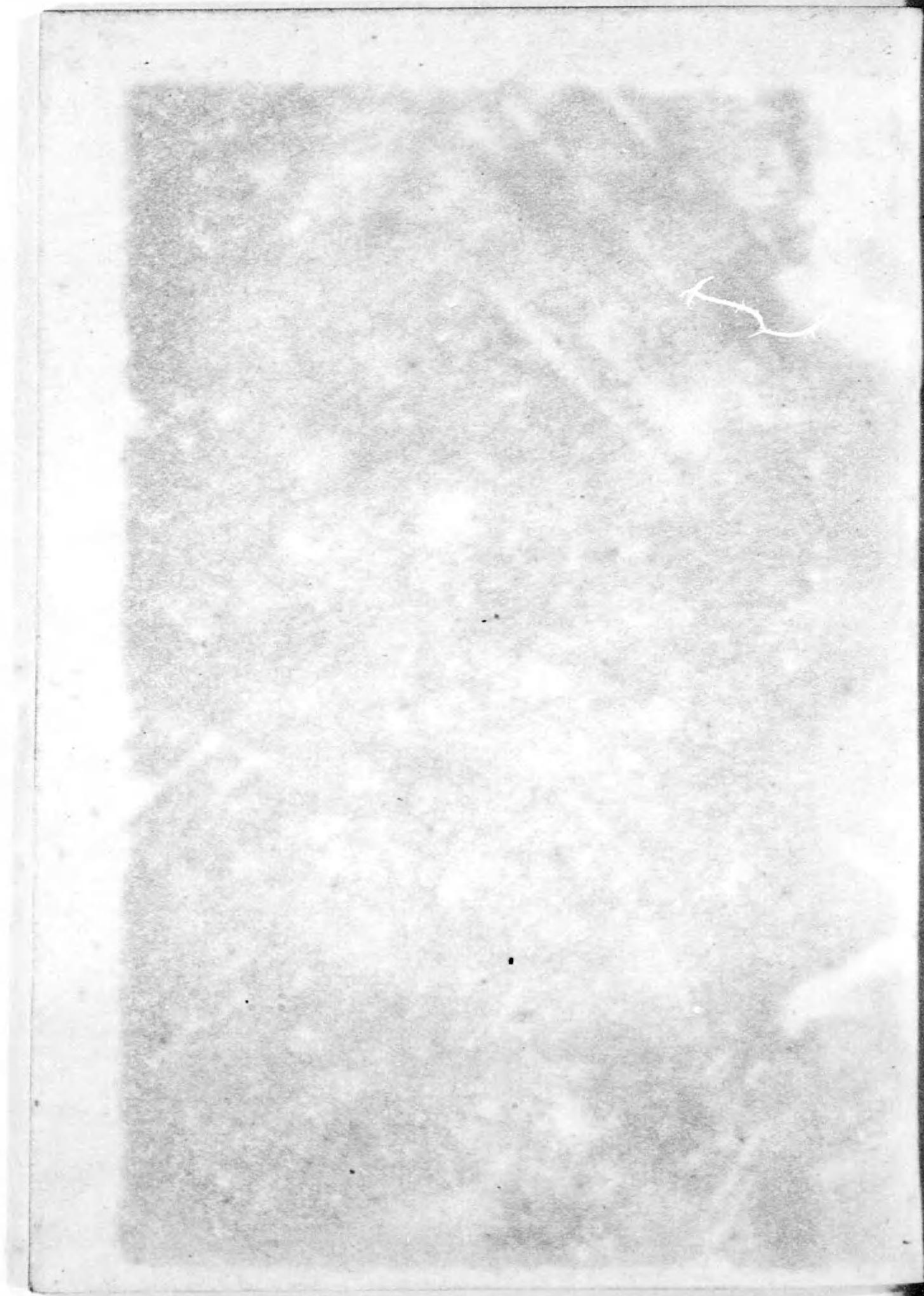
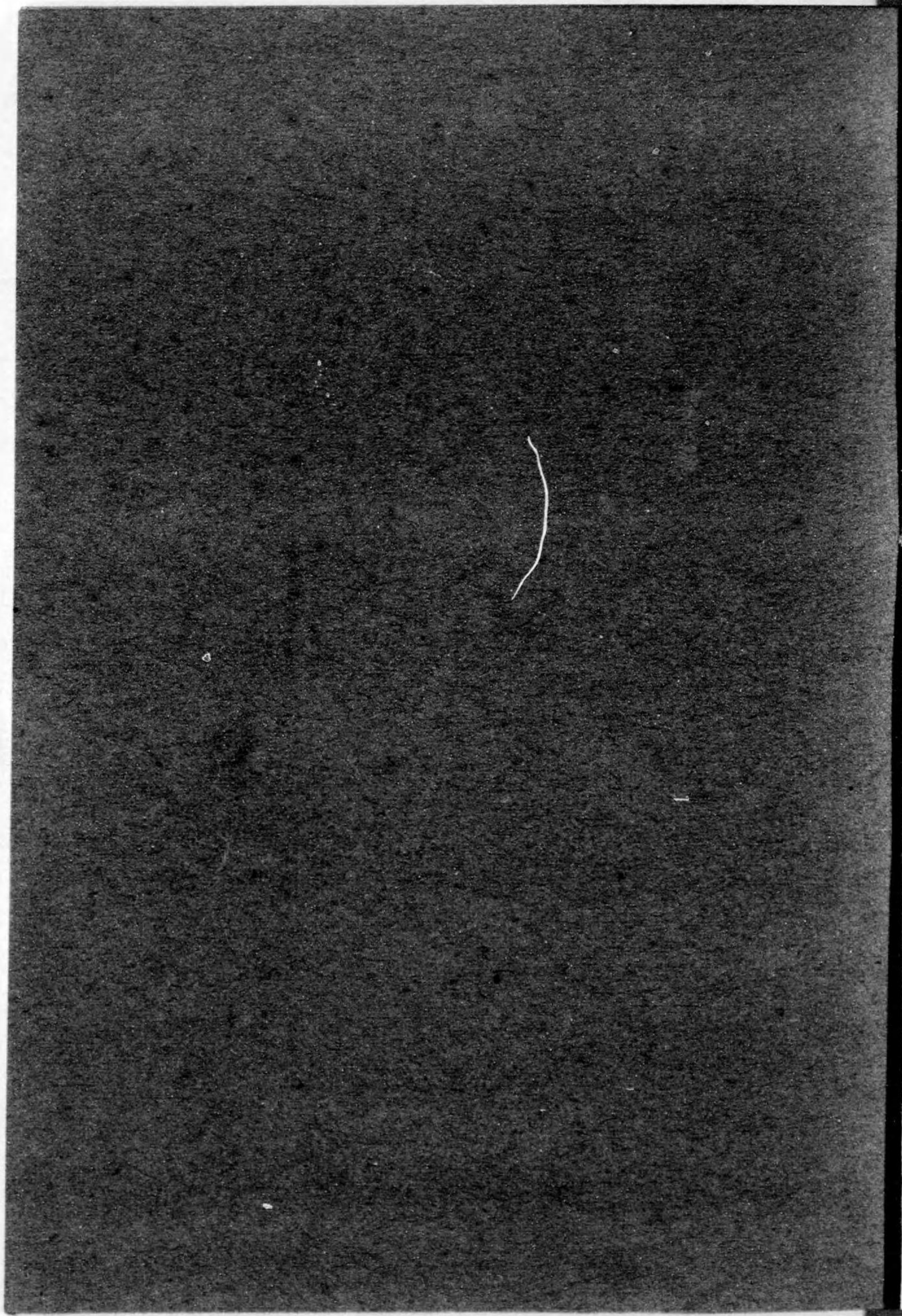


始







特100
164-



此書を親
し
く
る
前田夕暮氏
におくる

大正
4. 9. 21
内交

序

陸前にて熊谷君。

僕は一昨早朝東京を出發し伊香保榛名地方に遊んで、
昨夕濃霧のなかをこの山上の大沼の畔にある古い旅館
に着いた。そして、はじめに君に此手紙を書くべき場所
に來たやうな心持がする。といふと君は直ぐに赤城と
いふ山を想像するであらう。それから沼―沼は大沼と
いふ―を想像し僕の今手紙を書いて居る古い旅館を想

像するであらう。まことに赤城は氣持のよい山だ。六千尺といふのであるから、日本アルプスに比較したら決して高くはない、然しこの山のよいところは決して高いからといふのには餘り關係はない。此山は不知のふるさとに對するやうななつかしさと親しきとがある。いたるところに白樺が秋風に吹かれてゐる。その白樺の林のなかには稍野性を帯びたおとなしい動物（牛や馬）がしづかに旅人の姿をなつかしげに眺めてゐる。霧はたえず青い頂きから流れて、忽ちに白樺の林をつゝみ、自

分の旅館の襟をかすめて沼の面になびいて行く。ともふと直ぐに山のいただきがほつと現はれてくる。空が刷毛でばいたやうにすうつと青くみえてくる。どこか黒鶉の啼く聲がきこえる……………

熊谷君。

君をはじめて知つたのは今から七八年前であつたらうか。その頃は君といふ人がどういふところに、どういふ生活をして居る人か鳥渡想像出来なかつた。然しなから、僕に第一好感を與へたのは、君が如何にも生一本な

純な感情で生きてゐる人であるといふことである。君には都會の埃が泌みてゐないといふことである。そして、君がいかに郷里の自然を愛して居るかといふことなどが次第に理解されて來た。で、今では君の作品を透して君の田園に於ける生活が明かに理解されて來た。

熊谷君。

君を思ふ毎に、野火の煙の上になく雲雀をきき。陸前の山ふところにさくうす紫の通草の花を思ひ。生れし兒のために君がたづぬる黄蓮や、路のべに散る水草の花

が思はれ。夏山に君が研ぐ利鎌の匂ひ、冬日なまぎりとぶかけすの群れ、君が伴子のために飼へる仔兔の瞳、ぐるりと燐光りする君が家の太柱、冷たきひろき板敷君が家族のなつかしき夜語のなかにとろとろと燃ゆる赤き圍爐裡の火、さては與助の擔へる天秤の悲しく動く入日の畠ほのかに赤く夜空を染むる山燒、野分のなかの眞竹原や、青空のもとを冷たく流るる冬川、うす烟る水色の山、燒野に立てる立枯の木立や、あなじとぶ春の燒原などが、それからそれへと眼にうつり、眼に消えて行く。

熊谷君。

君はまことに田園を愛し、郷里の自然を愛する人である。君は北陸前の果てに、春逝けば夏、夏過ぐれば秋、秋暮れて冬に推し移る自然のリズムを絶えず君が生活のうちにとり容れ、自然を君が歌の保護色たらしめ、君の生命を自然の呼吸のなかに靜かに脈うたしめてゐる。て、君の歌を読めば讀むほど君が自然に對して鋭い感受性をもつてゐる人であることがわかる。

熊谷君。

君は君の生活を自然の色調にまみれしめてゐる。君の歌には君が郷國の地方色がよく表現せられてゐる。これだけでも君は優に今の歌壇の識者に認められるだけの素質を備へてゐる。然し、君も絶えずいふ通り君の藝術は「野火」一巻をあとにして更らに新しく發芽し、更らに新しき道に向つて歩みをはこばねばならぬ。そして、君のいふ新しい萬葉の歌を完成せしめねばならぬ。吾々は絶えず我が作品に對して苦惱し、不満を抱き、悲しき愛着の念をつなぐ。さあれ「野火」一巻は君が過去數

年間の生活史としてこれを繕くときまことに意義深きものがある。何となれば君は初めよりして君一人の道を歩み來りし人であるからである。そして君は君の歌をして何物にも汚すことを敢てしなかつたからである。
熊谷君。

君の處女歌集「野火」の出づる日近きを思ひ、僕は心よりの喜びを感じず。まして親しく僕に贈らるるといふ事實に對して君と僕との接觸が「一層野火」一巻を以て有意義に考へしめられる。まことに「野火」は君が道程の最

初の道標してあり、僕のためにはえがたき示現であられ
ばならぬ

大正四年八月十日

赤城山上にて 前田 夕暮

野火目次

序	前田夕暮
大正四年	七十九首
大正三年	二百十一首
大正二年	六十一首
大正元年	三十二首
明治四十五年	

野火目次

大正四年	七十九首
大正三年	二百十一首
大正二年	六十一首
大正元年	三十二首
明治四十五年	

野

火

熊谷武雄

大正四年(六月造)

さみしさに耐へつゝけふも山やけのひ
びき間ま近くわれすまひけり

3
いつとなく雑木原ざまきより外山とやまよりとつぷ
りくれぬ春の長日は

又^マ手^テくむと近き山根のすゝ原にすゝ刈
ればひるの鳩なけりけり

畑のすみいくつも小さき坪^{つぼ}さりて南瓜
の床をつくりけるかも

春の陽のあたゝかきうねに種芋を一つ
一つにならべ行くかな

うねの土かぶせむとする種芋の芽をふ
けり小さき紫の芽を

すぐろなる山の焼樹やけじにもず鳴けば春の
まひるのうら悲しもよ

もずがねのきこゆる外は四五本の焼樹やけじ
ばかりのひるの野平ののひら

春陽はるひ暈か萱草くわんそうのかげにぐつすりと此孕猫
ねむり居るかも

くれのこる彼山の端はのあかるみへ向ひ
てとべるもずの高鳴き

春山をくれば名しらぬ雑木のわかめの
 いんの眞赤なるかも

春じめる山の朽木の椎茸をとらむとよ
 れば香の悲しもよ

すぐろなる野中にのこるからす麥朝雨
 にぬれて光る悲しも

われしらずむしりし野路のからす麥す
 てのこしたり青き一莖

刈安かきやすのわかめのかげにしどとどゐてさえ
 づりあかぬ山のくれの陽

青麥あおむぎの中にわれたつた掌てのひらに麥奴むぎなんぼの穂ほの粉こな
 のつきしまゝ

矮ちひさ鶏どりのなく田舎いんやのひるのまはり路みち此こゝ旅たび
 人は一人ひとりなりけり

春川はるがわの清きよき淺瀬あさなに蠶こ苴わしを洗ひふ女むすめの脛ひざし
 ろきかも

砂川の浅瀬をくだる魚の背のきらと光
りて水はねにけり

山桑のほぐれもはてぬ芽はいつか霜や
けて黒くくさりけるかも

春山の芽ばえ忘れし雑木にきつゝいさの
ゐてなかね晝かな

山上の卯月の木かげかたぐりの花の小
さく咲く大牟呂峰

我が妻が乳房炎にやめる日を通草は雨
にちりはじめけり

古茅の根株の中にやゝ青くもゆるすい
きの芽の悲しもよ

赤にごる出水の芥追ひ追ひてつばくら
は低く川下へ飛ぶ

×

朝の床父と相寝て父にのみわかるはな
しを我が乳兒はいふ

青みゆく雪解川の川下に河原に誰ぞや
古草を焼く

雪どけの海手のかたゆまづ見ゆる山焼
けの夜となれば悲しも

夜のかなた月代つきしろよりもほのかなる遠山
やけのうらさみしさよ

夜の山の山火赤きにまはだかの心まと
もに向ひてあらしめ

我が胞をうづめしといふ樹のもとに眸
とちて立てるうらさみしさよ

悲みのはてに神見ず我れを見ず只一點
の眸に赤き火

麥ふめる女の彼方風海にときをりさら
と波光るみゆ

伯母がため春のひがんの菩提寺の鐘を
一撞きわれ撞きにけり

山石の野づらを黒き蜘蛛這へば夕の心
くらくなりにけり

畠のすみかまどつくりて鮫腸べとを煮るけ
むりの上を横ぎれる鳥

夜に入りて漸くはれし庭のすみぬれし
眞竹の葉の光り見る

春山の花さく彌生手弱女の乳癌にゅうがんの乳房
くさりゆくかも

乳癌にゅうがんの乳房にゅうぼうくされば手弱女てじやくにょは黒髪くろかみなげ
て彌生やよいを寝たり

乳癌にゅうがんの乳房にゅうぼうくされば悲しげかなしみげに手弱女てじやくにょ見
入る草花くさなたねの床

久ひさに病やまむ汝なが針はりさしの縫針ぬいはりの赤あかさびに
つゝ冬ふゆふけにけり

魚うまの瞳まなこと我われが瞳まなことあひし水面すゐめんにかなし
や冬ふゆの黄きなる落日らくじつ

親しらぬ箱の仔こ兎うさぎさむき夜をひとりわ
びねてなかぬ仔こ兎うさぎ

薄月の霜夜のかげをかたしきて野犬が
ねむる小屋ののきばに

童謡の上に夕陽のあかくとてらへば
一人泣きたくなれり

雪山せつさんのみねよりみねへふきつくる嵐の
上の黄なる日ひ輪りん

大空や夜風と夜風打ちふれて冬の大地
にふきおつる音

土方等が荒太繩に木畚あむ新墾小屋の
さむき冬の日

太繩の木畚のあらし目をふける朝風さ
むし冬のにひばり

古家の灯のとどかざる夜のすみのうす
くらがりに光る水甕

くろくくと釘ぞとがれる古家の煤光り
 する太き柱に

冬の月木かげと木かげかさなりて地に
 うすくろき山路をふむ

ぷつつりと黄なる疊につきとほす疊屋
 が針の大きなるかも

ぼつねんとひとりすまひのをんどりの
 尾をたれて鳥屋にねむる悲しも

鏘々^{さう}と風焼空の下に鳴る友ずれわたる
青真竹原

七草の粥煮んわか木迎へにと幣^{ひな}を手に
して春山を行く

我がまゝを汝にとほさせて夕濱のまは
り路をば歩みてありき

風上^{かま}の山の高嶺^{かみ}に雪けむり立つ日は母
と峽^{かひ}にこもれる

父がためとろろ汁すと雪解する春山の
かげに山芋を堀る

伏し柴に枯れし芋蔓ところ蔓はひもと
ほろふ山は悲しも

うづくまり伏し柴のもとに芋ほると土
かき出だす掌のまくろさよ

黄粉餅天ざかる鄙の朝寒に子が名付親
おもふなりけり

水色の山遠けむり野邊けむり雪解の國
に天つ雨降る

山少女野老堀るとよいむれゆくむれの
しりへの頬赤の少女

雪どけの山邊はよろし山少女あからを
とめら野老ほるかも

春の陽は黄の若草にあたゝかく孕み雀
の背にあたゝかく

うすくさす夕陽の中の黄の山よ顔よせ
て汝と泣きたかりけり

放鳥の林に急ぐよろこびもおもひぬ君
に逢ひに行く身は

かくれなく一樹いぶきのかげのなつかしさ黄き
葉はとびつくす夕月夜山

うす黄なる入陽の山へなさにゆく鳥見
れば妻も子も忘れけり

芹川せりがわの杭にとまりてみそさゞいなきぬ
 遠人おもふ冬の日

霜夜空我が掌てふりつる汝が乳房白きを
 おもふこの霜夜空

うなだれて何を憂ふる日輪はわれより
 燃えて天あまゆくならずや

我が乳兒に尿しをさせつゝながめやる冬
 の朝陽の中の裸木

太針は老いたる母が小さきわけに光り
て冬の夜ぞふけにける

はだれ雪母はかよわの身を忘れかや刈
る山の子をちもふらむ

涙もつものゝ限りよ安んじて涙をおと
せ落日の國

物とへば楮かうぞの皮をはぎながらわれを見
る瞳の光る山人

汝が摘む彼夕濱の冬草の波にぬれなば
われおもひてよ

大正三年

山草の黄ばみ行くとも汝が乳房あさへ
て太息人に知らゆな

×

紫に通草の熟るゝ山國とかりそめにだ
にせめて來たまへ

ものおもひせまじとすれど山草のいつ
しか黄ばみ散るにあらずや

×

いち早く峽に黄ばめるわかき木を見ま
もるに生命つかれけるかな

一人旅人の子の親の一人旅赤にごる空
黄なる國原

他國ひとくにの黄ばむ山路にふりかへり彼旅人
も見入りけらずや

旅人にあらずとするも山草の黄ばめる
上の雲雀なるもの

こはひばりなになくひばり黄なる草ふ
むも悲しき此一人旅

我が汽車の窓にむかひて稻村のかけよ
り笑める栗原少女

×

あそ秋の街のはたごの裏庭に我が爲め
黄ばむ樹かとなげかゆ

黄なる山てりかへす陽が小さなる金の
 十字架に悲しからずや 山村暮鳥氏に

×

おはぐろの女の國にわが妻の白き前齒
 もうらさみしさよ

うす闇に光る夜の川、川端を額ぬかたれゆく
 は人の子の親

一つぶの掌たなごこの粃あはの皮むけば水晶に似し
 米の悲しや

我が肩に銀杏の黄葉の散りて來よ尼院
へといま憂ひて歩むに

翅鳴らし飛ぶは何鳥心なく黄草の上を
とぶは何鳥

あそ秋の山に向ひて我が涙おとすまも
なし乳兒可愛ゆさに

ぐつすりと乳兒は寢入りてめざめざり
青萱山に雨わたれども

秋の崖夕うす黄いの土くれのくづれに
 螻姑ろうこはなきいでにけり

ひとつひとつ青豆柿を打ちつぶし澁汁しぶじ
 つくる日のうら悲しさよ

秋ふかき沼澤ぬまのしめり土を這ふるもり
 のくろき背もまさびしや

利鎌とがまの刃草叢の中の尖り石かちりとか
 めば火は走りけり

おそ秋のしめらへる畑の土ふみて大麥
の種子たねを一人まきにけり

うす黄なる大麥の種子たねを掌てに握りおそ
秋の畑に立てば悲しも

かし鳥は來鳴かず秋の板敷のつめたさ
感じねころびてあり

おそ秋の黄なる陽がふるくつきりと大
根がしろくぬけいづる畑

我がよれる野木灰白の木の肌にしみと
ほるまで降れ秋の雨

×

秋來たる子がはじめての秋來たるいと
ほしむ父がうるむ瞳より

あかつきの天あまにせまりて青山は遠く聳
えぬ秋來たるらし

無花果いぢぢの青き實みさけておちぬれば子が
はじめての秋は悲しも

名もしらぬ庭草の花もなつかしや子が
はじめての秋にさければ

うす赤く匂ひいてつもはじめての我が
子が秋にさく草の花

秋來たる北陸前の草の戸のからたちの
實は濃青なるまゝ

他國の麥打唄の悲しきに旅人は涙おと
してすぎぬる

涙おとしすぎんとするか路はたの煙草
の花のうす黄なりとて

はたごやの二階のわれに向日葵は黄の
大輪をむけてさきつも

北上の曠野流るゝ濁流にわがわたし舟
こぎいでにけり

北上のわたしわたれば今更に旅人なり
しおどろきをする

黄の子馬いばゆる前にたうくと北上
の流にござりて行くかも

路の邊の桔梗の花も旅なればたはやす
く見てすぎかねにけり

馬の子の小さきひづめの跡かなし秋の
岩手の高草の路

秋の路ひろきが中を土いきれひたに感
じて旅人行くも

黄に濁る阿武隅越えて旅人は秋の磐城
の國に入るかも

あぢさゐの水色の花むらがりてさける
山邊に忍びてあるかも

心いたみ鄙の長路ながみちの草いされかぎつゝ
行けば悲しや白日

山百合の花さく國に黒髪を忘るる従妹
夫つまあらずけり

梧桐の葉の散る家にくる髪を忘れて夫
もなき従妹すむ

朝月の光悲しみ初秋の木の下露にぬれ
て行くかも

朝月の光の中にかたむける桔梗をいた
み秋山を行く

朝月の光かぎりふ山上に秋草刈ると露
にぬれたり

朝月の光の遠にほのうかむ秋山みつゝ
鎌とげるかも

遠岬の燈竿の灯の戀しきにあかつき露
にぬれゆく秋山

遠岬の燈竿の灯になげかへり秋草刈る
とゆく曉の山

遠岬の燈竿の灯は秋草をわが刈る瞳に
うす赤さもよ

遠岬の燈竿守をおもひけり草刈る山の
あかつきにして

赤濁り遠海低し朝月の光かぎらふ山上
にして

遠海に赤き太陽の生るればわれを忘れ
ぬ山上にして

×

紫蘇汁の冷えしをすすり初秋の山家に
父の老いて行くかな

頸赤きほたるが秋の水草の葉うらを這
へばなげかひにけり

石走る垂水の上にかみいてて岩魚の
遊ぶ秋は來にけり

朴ほよのきの青き廣葉がひるがへりせまるが悲
しくらき山窓

黄に濁る大川口に沙魚つると我が子を
おきて行けば悲しも

紅皿べにざらを久ひさに忘わすれしわが妻つまの紅べにさし指ゆびを
見みてありにけり

よち／＼と庭にわを歩あめるせきれいのあら
悲かなしもよ其そののしろき腹はら

初秋しゆしゆのまひるの厩乳うまのちに飢うゑし子馬こまの瞳まなこ
のいた／＼しさよ

山やま皺しわの皺しわの一つに入いりつ陽ひかりのあかるく
させば汝なに心こころとぶ

ひらがりにて秋の鴉の來なく日の心悲し
も子守しあれば

干草せんそうの山より山に夕霧のわたれば末の
子をおもひけり

のろくくと山より霧は這ひて來ぬ幼子
いだき立てる夕戸に

誰とまだ見覺えのなき面持し見つめて
あるよ子のくろき瞳は

ひるの部屋秋の蠅とび乳呑兒のねたら
ぬ顔のうらさみしさよ

穂を孕む青きすゝきの上にふる白日びやくじくの
つよき光慈しも

森かげの草にすわりて榛はしはかの實をむくと
きも吾子をおもひき

一人もつ末の女めの子をいたはりて紅べにの
花さく山國にすむ

しらくくと蕎麥の花さく山國に女の子
 生れて百日を経たり

夜の庭に山霧くれば子を抱きて早寢を
 すなり虫なくものを

ひよろくとおはぐるとんぼとびて行
 く水草に秋の夕陽の散れる

茄子畑の番小屋の灯がうす闇にゆるい
 を見つゝわれ歩み居り

84
夜はふかしわれとわがうつ拍子木に
子畑守りは悲しからずや

大搖れに空のみどりもゆれてけり野分の
の力天地にみつ

一面にふき平めよ一面に野分の
中の青き山々

ころくと野分の
中の草屋根をころが
りあつる黄なる南瓜

穂を孕む稲の葉末に夕露ののぼるを見
つゝ汝をおもふなり

ふとかみし青き葡萄のすばければ従妹
をおもふ初秋の山

祖母のやめる岩手の夕山のかげろへば
母はうれひたまへり

末摘花見てあれば悲し遠人の紅さし指
をおもふならねど

夕虹の山になびけばくしけづる従妹が
髪をおもふなりけり

青くるみもぎし我が掌のうす黄いに染
みしを見るとかざす秋の陽

間引菜をもて来て妻が與へ居る仔兔の
箱に夕陽が黄なり

山わらぢけさも素足にゆひつけてわれ
行かんとす秋草の山

赤々と夕陽はてれり牛飼が禪ぜんをほせる
秋の河原に

晝顔のさける河原に牛飼はふどしを洗
ひ干してけるかも

秋庭のやけ土の上を一つとぶ黄の山蜂
のうなり悲しも

x

うまれたるあかんぼが爲めに我が掘れ
る黄蓮わうれんの黄きなる根のまさびしや

あかんぼの泣き聲をきゝ眼をとびてく
りやのすみに黄蓮を煮る

乳汁しらぬあかんぼにまづふくまする
黄蓮の汁のうす黄なる色

甘露ふるま夏の山のあかつきに生れし
子かなし女なりけり

抱く手にあかんぼねむり夏虫の夜ふか
くなけば憂ひ居にけり

かなくと庭木になけばふところの子
はぱつちりと眼をひらきけり

わか竹の露ちるかげに吾子抱き河鹿の
聲をさけば悲しも

女の子一人しもてば水草のうす紫もあ
はれなりけり

名付親遠きにもちて濃緑の國にことな
く育ちゆく子よ 二首みほ子が爲めに

名付親遠きにありてうつしゑに一目見
たしといひにけらずや

金蓮花赤く咲きつゝ子の久に眼を病む
夏はたけなはとなる

かよわき子持てば悲しき親心木草の花
のちるにつけても

七つなる仲子ななこが爲めに仔こ兔うさぎの小さき箱
をわがつくるかな

金網の前に來りて仔兎ウサギの鼻うごかせば
よろこべる子よ

濃緑ニホキの草野を知らず耳ふせて古箱のす
みにねむる仔兎ウサギ

水無月のまひるの山に露ふればかつこ
うとなく鳥のさみしや

高原の朝草露にうちぬれて鎌とげば鐵
の匂の悲しや

石竹の花さく路に東女も立たせて見れば
 やさしかりけり

陽も知らず吐息悲しくひるがへる繁木
 が中の草の下葉よ

あへぎく赤き舌はく夏犬の悲しもよ
 土に横たはりむつ

草原の木株の黄なる小さき巢に山蜂の
 子は育ちゆくかも

草原の木株の黄なる巢をいでて山蜂と
べば山も悲しき

ふと瞳をそらしし君はわが駒の赤き頭
絡に見入るなりけり

馬さへもいとひ見むかぬ山の邊のとり
あしの花はあはれなりけり

古庭の石上にいでて河鹿なく月明の夜
は君のしのばゆ

石走しる水よりあくる曉に河鹿かのなけ
ば君のしのばゆ

汝に心うごかぬまなし風忘れ此夕草は
そよがざれども

口ふりしまゝ別れ來し鄙の路しめらへ
る土の匂悲しも

汝が街をそがひとなしていづるさへ悲
しきくれを雨となりにけり

山にゐて山の小鳥の名を知らず垂乳根
の母の齡としをえしらず

黄に濁り春の陽暈ひかりの傾かたげばなんにも知
らぬ女めもなげかへり

春の陽の暈かするまひる眩暈めまいすとみごも
る妻は憂うれひるにけり

みごもれる妻の乳房のおもきかも春の
入り陽の黄かに暈かすれば

芹せりつむと汝が白き手をひたすまで淺澤
の水ぬるみたるかも

焼枯れし木株にまじりあきな草紫にさ
く夕山を越ゆ

焼枯れの木株のかげゆとび立ちしひば
りも悲しひとりなりけり

焼枯れし木株の中の一もとの芽をふく
見れば心悲しも

妻がため春の深山みけに子安こやすの木たづね入
る日のうら悲しさよ

子安こやすの木たづねつかれて春山はるやまのかけに
なげきぬ妻みごもれば

焼原やきはらを行けど野火のび見ず焼土やきつちの匂におを知ら
ず汝なをおもへばか

いたはりて行きぬ野焼のびの焼土やきつちの匂におに耐
へぬみごもれる妻

もやしたる種^この芽のうす青し八十八
夜きたる山國

みごもればものうげの瞳に種^このもや
しに妻の見入るあはれさ

みごもれる妻が乳房ゆ乳^ち汁^いやゝに洩^もる
日となりて春ふけにけり

みごもれば物うきかもよくけかけてた
すきはならず桑は芽ぶくに

はしきやし妻みごもれば山桑をことし
 は一人いてて摘むかも

妻子持ち春霧ふれる夜の木原憶良をお
 もひ行けば悲しも

夜の山々春霧ふれば石女はさみしき乳
 房いだき寝るかも

沙川の流の上を鶯一つ舞へり春の陽琥
 珀の如し

*

鶏は悲しき鳥よ蒼空を永久に忘れて地
を歩める

蒼空を永久に忘れし鳥として鶏よ汝が
悲しき翅

にはとりは春の朝陽に頸あげて高なけ
り飛ぶを忘れし鳥よ

垂乳根の母なりければ刺の樹の穂の芽
もつみてさしげつるかも

垂乳根の母なりければまめやかに御^み肩^{かた}
もみつゝ夜をうま^まずけり

垂乳根の母なりければ眉そりしあとの
青きもいたましきかな

春山のかげにうす黄の芽をふけるとり
もとまらぬさみしき一^い樹^{じゆ}

榎^{たの}の木は手もふれられずうす黄なる芽
をなつかし^なみ立ちつくす山

物洗ふみごもる妻の眼の前に柳の花は
うす黄なるかも

美女すめの彼乳兄弟あに久ひさに來きず柳の黄なる花
あちぬべし

春木原雨しげければおもひいづ山が
つが娘むすめの彼乳兄弟

乳兄弟の娘むすめのなつかしき春の夜は青木
の木ぬれ霞流るる

乳兄弟の娘の黒髪は匂ふらむ其扉ヒの杏あんず
花を持つらむ

心なくむしる春木の皮の香の悲しや神
を孕むといふに

みごもれる妻の憂ふる夕山の野火の火ほ
上かみに雉子きりなきにけり

濁川の流を前に相槌あひづのかぬぢがつまの
うらわかさかな

忘れても金縷梅さける山越ゆなまんさ
くは黄にみだれさく花

空斜に翅つばさならして高とべば小鳥となり
て飛ばんとぞおもふ

いたづらのうす紫よ君が來ぬ鄙びんの長路ながぢ
のいたどりの芽よ

鄙びんなれば父が羽織の假紐かりづなの紙紐かみづなも人は
笑はざりけり

ぬぎすてし父がみぢかき古羽織白きも
 さみし紐の紙紐こしなひよ

水色の山は悲しも馬ば鹽なまひをへだててのぞ
 む春のたそがれ

×

むらがりてあをじはとべど我が瞳ひとみあぐ
 るにあもし春の焼原

友が妻まだみごもらず如月ごとげや山國の水
 いただぬるまぢ

山人が太き烟管の火皿の火みつゝ夕ぐ
れつれ立ちにけり

うすのろの男が下駄の太き緒のさみし
や土手に夕陽がちれる

待つといはゞ夜の向つ峰の走り火の火
中も走り我れゆかんもの

我が煙管の火皿の火よりやや赤く遠山
やけぬ闇のかなたに

雪解する山のふもとの片くりの紫の花
みに來じか君

雪解する山裾にさく花なれば紫なれば
悲しや片くり

雪解する山越えて逢ひに來てくる人
はあらぬを片くりの花

君戀しかぐらきむろの種芋の芽ののび
て行く如月くれば

うづきまの犬の尻尾のうごけるを見お
くる土手に夕陽は赤し

むく犬の尾の渦巻がだんだんにひろご
る如し土手の入りつ陽

軒の上おぼつかなげに啼きてゐる黄雀
の黄の口の可愛ゆや

如月の山をそがひにまさびしく順禮は
鉦たゝきて行くも

はだれ雪こゝは岩手の山つゞき焼原つ
づき黄なるわか草

迷ひ入る夜闇の森の古道に青く光れる
朽木悲しも

雪解する山はさみしも背負ひゆく杉の
苗木の匂悲しも

路はたの家の寡婦の日髪はもその私生
兒は襁褓につゝまれてあり

三人の田舎娘の立ち話山には午後の春
の陽が赤し

はしためはるねむりゐたりあしあとを
ぬすみて家畜すぎゆきにけり

こやし桶になふ與助の天秤のたゆ
うごく畑の入りつ陽

×

うづくまり牛糞を堀れば黒土の底に悲
しく牛糞ぞ匂ふ

眇^{すがめ}なるわかき修路^{しうろ}夫^よほころびし古服を
 着てはたらけるかも

山鼻をめぐりくれども修路^{しうろ}夫^よの眇^{すがめ}の顔
 が眸^{まみ}にのこれる

一^{いっ}線を地平^{ちへい}のはてに濃くゑがき黝^{くろ}める
 冬の遠海が見ゆ

落葉樹の林を出でてぼつちりと月下^{げが}に
 われの小さくうごける

田舎路の上をよこぎる電線になけるし
 ととの灰白の腹

×

伯母が柩ひつぎかきゆく山路立枯の白き一樹いっじゆ
 の眼にいたきかな

高原の伯母をうづめし土饅頭どまんどうめぐれる
 青きはじき竹はも

みもごもれる妻が黒髪おもくくと夜の
 木枕にうちしめるかも

我が襦衣じゆいの釦ぼたんをかゞる指さきのしろきが
 閨いんのくらすき灯あかりに浮く

山やまの間ま赤く濁りて朝あさの陽ひかりは冬枯ふゆかの木に
 かげろひにけり

つきつめし心こころのはしにふれて來きる昨日きのうは
 まて知らぬ蒼空あそらの色

思出おもひでももたぬにあらぬ山人さんじんにこはあは
 たゞしき木の葉はしぐれぞ

冬枯の林の中におぢくとさみしく立
てる青の一樹よ

炭がまの夜ごめの焚火冬枯の林をすき
てうす青きかな

水鳥の翅つばさの下にうす光る冬川の流見れ
ば悲しも

草鞋わらじの緒つなむすび直すとかゞまれる眼の
前の冬の草の芽の青

汝おもへば冬木の枝の宿り木の實の赤
 きにも涙ながれぬ

夜あらしに庭木の黄葉のとびつくし窓
 にさみしく赤き朝の陽

茶の花は萌黄の布を張板にはる妻の前
 しらくさくも

おもひ屈し野路をいゆけば立枯の山百
 合の種子の夕風に飛ぶ

苗床の霜よけ薦いすの霜とけず我が濁る瞳
に朝の陽の赤し

たてかけし葛家くわがのすみの稲いね扱あの赤さび
し齒はに光る窓の陽

小夜しぐれ彼もらはれぬ牛飼の一人娘
はわびて寝るらむ

ほのかにも汝がすむ山の黄に低しひと一株かぶ
の茅かやのそよぐ彼方に

冬枯の山をそがひに刈る茅の尾花の飛
ぶも汝をしのばしむ

大正二年

我が簞を君にしかせてものがたる秋草
の山のひるのこほろぎ

153
簞ぬげばみのをこぼれて我が前の土に
こぼるるくろき草の實

めさむれば古き時計は午後四時にと
まれり秋のつめたき板敷

あかつきの野澤の霧に簑ぬれていゆく
わくごになく水鶏かな

山葡萄^き畚にあまると告げやるもなほ山
ずみをいとへるか汝

此男のがるる秋の國しらずもだして山
に青草をやく

縮緬の襦袢の袖を買ひやらんとばかり
に妻を峻に老いしめぬ

このまゝに別れていゆき再は來じとぞ
われのいひもせざるに

黄に濁りしづまんとする秋の陽を横ぎ
りて飛ぶかけすの一むれ

秋山に我がさきり出だす海^の苔^の柴^の若木の
匂むねいたましむ

海苔柴のわか木のわか木の青葉我が扱扱けばかな
しき匂せまる秋山

ぼらの實の赤くなるときまた來よと磐
城少女はわれにいひしか

旅人は路傍の家の軒につる黄の葉煙草
の香にむせびけり

焼飯の匂にひたり秋草の黄ばめる中に
横たはるかも

雨來たる秋の磐城の山麓の木原のしろ
き立枯の上

秋の蟲一人は母とふるさとに一人の吾
子は父と旅寢に

秋の風磐城の山を前にして汝をおもふ
とき飛ぶ心地する

旅人の眼に悲しくも死火山の赤焼石の
陽に光りたる

うす暗き厩のすみにつながれし人喰馬
の赤たゞれし眼

秋山をそがひになして藤蔓の人喰馬の
口籠をあむ

ことしより一人寝をする子のために妻
が縫ひたる小さき寝巻よ

庭木の枝かなしなつかし幼な日の彼ぶ
らんこの繩ずれのあと

なにげなくたぐる通草あひびの蔓の末青き實
のありさみしや秋山

汝きもへばはたぐよりもかるやかに
飛ばひとすなり秋草の山

x

自棄の涙河原うつぎの毒もてる實の色
づけば流れいづるも

汗あえて耕やす畑の土いされ自棄の男
のむねいたましむ

晝の雨葉廣かしはにふりいづれど此は
した女はめざめざりけり

我が妻が蠶飼つかれの瞳の色も夏桑の
芽もさみしき七月

木のうろの山峰の巢に蜂の子の孵化る
か森に黄なる陽のふる

つかれては山畑添ひの青き木のかげに
ひる寝もむさぼりてけり

黒髪に散る山栗の花などもなつかしがりて君はわかれき

天蓼マニヒの蔓つるをねぶりてよろこべる家畜かちくも
君を戀しがらする

×

馬うま酔よ木き散る汝なをおもひゆく春山に白く
さみしく散りしきにけり

自棄まじの涙なみだおさへ得ぬ日を赤棟あかむね蛇へび杉すぎ菜なの
かげにいてて遊べる

拾ひあげし焼野の小さき焼石のあたゝ
かきにぞ涙ながるゝ

掌たまたまに通草みけすの花をのせし故おもひいだせ
る汝にあらねども

汝をおもひ春山ゆけば悲しうも通草みけすの
花のさきつゞく路

慈姑あまのこの芽青くさみしく瞳まなこにうつる水田
の畦をわかれ來ぬれば

春雨にいたどりの芽のぬるゝにも汝を
おもひて立ちつくす路

すもゝさく四月は悲し人妻はかほそな
る手に麥の雜草くさとる

×

青木原霞流る夜となればなきむせぶか
や彼の鼻は

野火遠く走しるをながめ焼土の匂の中
に立ちて涙す

とびく／＼に焼野の小さき木のうれの芽
をふける見て涙ながしき

竹むらの中に家畜のなきがらをうづめ
むとちもふ竹の鳴る日を

河淀に流れよりたる流れ木の上にかな
しくなく川がらす

きはられて屠^と牛^と者が娘^りもらはれずわび
すむ山にこぶし花ちる

うづくまり春の木かげに山獨活やまごっくわくの芽を
ほるときも君を忘れず

さかりゐる子はよしわれをおもひつゝ
あはて死ぬらむ子のあれよかし

一とびにとび越えて逢ひに行きたさの
なげきの前に夜よるの山高し

ゆく舟のあとに一路いちろの光るありなかぬ
鷗うのとびめぐる海